

論文の内容の要旨

氏名：富田真浩

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：古代インドにおけるアスラの変容に関する研究—経典の文献研究と歴史・考古学的視点からの考察—

インド・イラン共通の宗教を持っていた時代では、「アスラ」は偉大な自然現象を司る神の称号（‘lord’，領主）として用いられていた。

しかし時代が下っていくとヒブシサーマル後の寒冷期によって前 1800～前 1500 年頃に急激な寒冷化と急激な乾燥化が進む。そのため、アーリヤ人が温かい地を求めて南下し、インド北西部に侵入する。

前 1500～前 1000 年の前期ヴェーダ時代において、アーリヤ人は乾季と雨季にそれぞれ遊牧と農耕を行い、この時期にアーリヤ人は東へと森沿いに移動を拡大して領地を増やしていき、次第に生活における農耕の重要度が増していく。この頃にアーリヤ人の進行を妨げる存在であった先住民アスラと神話上のアスラが重ねられ、アスラは「先住民の‘lord’」という意味にシフトしていく。この際、「アスラ」とほとんど呼ばれることのなかった「インドラ」が善の意味を持ち、アスラの対立概念となったと考えられる。更にインドラは雷の神でもあるため、稲作・農耕を行う地域にとっては、その後に雨を降らすことを象徴する「雷」が善い存在となったと考えられる。これに対して代表的なアスラとされていた神に暴風神ルドラがいたが、暴風は作物に被害を与えるものでもあるため、アスラが悪しき存在として扱われる一要因になったと考えられる。

後期ヴェーダ時代である前 1000 年以降には、アーリヤ人は鉄器を使用し森を切り開き森林地帯を平原へと変えていく。それに伴いアーリヤ人は「森の民」であった先住民たち（アスラ）を隷民化し農耕・定住生活を送るようになる。するとアスラは実際の敵としての脅威ではなくなり、神話的存在で「神に抗う悪しき存在」として記されるようになる。

しかし前 900 年以降に「ヴェーダ文献」の注釈書である「ウパニシャッド」が作成されるようになると、その作者たちは過去の「ヴェーダ文献」を読み困惑する。神々から与えられた天啓の書に誤りがあってはならないが、そこで「アスラ」が良い意味で用いられていたのが、悪い意味へと変化していることに気づいたのである。この矛盾を解消するために、アスラが元は善い存在だったのに、悪しき存在へと変化した理由が述べられるようになったのである。

前 6・5 世紀以降、仏教が誕生しゴータマ・ブッダの説いた教えにおいては、アスラを善とするものも悪とするものも出てくる。ゴータマという姓が本来バラモン階級の姓であるのに、クシャトリア階級がその姓を用いていることや、釈迦族の葬送儀礼がアーリヤ系のものよりもアスラとされる人々のものと近いこと、更にはイランの宗教においてアフラ（アスラ）が光や火を司る神であったのに対し釈迦族は太陽族の末裔であると主張していることを考えると、釈迦族もアーリヤ人の侵略期においてはアスラと呼ばれた民族の末裔の 1 つである可能性が否定できない。そのためアスラが出家し阿羅漢になることが語られるなど、アスラを善い存在として扱う物語が説かれたと考えられる。またアーリ

ヤ人に対して教えを説く際には、アスラを悪しき存在と考えている相手の立場に立って説いたため、アスラが悪しき存在として描かれることとなり、アスラを天と別立てし、人間よりも低い存在とする「六道」の思想が生まれたと考えられる。

紀元前1世紀中頃から「初期大乘仏典」がサンスクリットで著され始める。サンスクリットはインド北部で用いられていた言語で、その中心はガンダーラやカシュミール周辺だったと考えられる。この地域はペルシア文化圏に追放されたサカ族と呼ばれるブッダの氏族が治めた地であり、太陽族の末裔であるアスラとペルシアの光と火の神アフラを重ね合わせていたと推測できる。また、この地域はアーリヤ人侵入初期に混血が進んだ地であり、彼ら北インドの民はギリシアからの侵攻を防ぐために戦う同志にもなるため先住民族（アスラ）と天に属する人々（アーリヤ人）を同等の存在として扱う教えが説かれたと考えられる。そのため、天とアスラを同じ分類にする「五道説」や「八部衆」の概念が形成されていったと考えられる。しかし、その後にインド北部だけではなくインド全域に教えを広めていく際には、特にアーリヤ人との混血が少ない地域、正統派バラモン文化が浸透している地域に教えを広めていく際には、完全に天とアスラを同等に扱うのではなく、天の中でもバラモン教で重要視されたインドラを特別扱いすることでバランスをとったと考えられる。この結果再び「六道説」が定着していき、現在の「六道説」が成立したものと考えられる。

この天とアスラを同等に扱う考え方が広まったことや「ウパニシャッド」で本来両者が同等であったことが記されたことから、『ヴィシュヌ・プラーナ』では、あくまでもアスラは悪しき存在であり、デーヴァに敗れる存在ではあるが、その両者の血筋を異母兄弟とすることで理由づけしたと考えられる。また、血筋が同じであるとするによってアスラに属する非アーリヤ系先住民族をヒンドゥー教に取り込もうとしたと考えられる。

その後に著された『ジャータカ』はアーリヤ人やバラモン教・ヒンドゥー教を信仰する人々に対して説かれたものと考えられる。また、上座部仏教の『ジャータカ』は、上座部仏教と思想的な対立関係にあった大乘仏教の経典において仏教の守護者としてアスラが描かれていたことに対しても反発していた可能性があり、『ジャータカ』の編集者が意識的にアスラ概念を初期大乘仏典における用法と反するものにした可能性もある。これらの理由から、『ジャータカ』においては、アスラを悪しき者として捉える物語が増加したものと考えられる。

9世紀頃に成立した『バーガヴァタ・プラーナ』では、アスラがヒンドゥー教にとって善い存在に変わる物語が描かれている。この物語は、非アーリヤ系の仏教徒やジャイナ教徒などを教化するためにヒンドゥー教が用いた物語だと思われる。そのため、アーリヤ人がインドに侵入して来た時期には敵であったアスラをヒンドゥー教に帰依する者として著し仏教やジャイナ教から信者を獲得しようとした意図が伺える。

以上のように、聖典類の文献資料と生活様式の変化や民族に関する考古学・歴史学的な資料を総合的に用いて、「アスラ」の概念の変遷の要因を考察してきた。歴史的証拠の確実性に関して脆弱な部分もあるが、「アスラ」の概念が変化するには、宗教における政治的な側面が非常に重要な要素として関わっていると言える。本稿の様に文献学だけでなく他の学問分野から多角的な視点でアスラに関する研究が行われた例はなく、画期的であり非常に意味のある成果を示すことが出来たと言える。

アスラは、インドでは主要な信仰の対象とならないものの扱いがぞんざいである。例えばバラモン教の墓である「シュマシャーナ」も仏教の墓のように信仰対象になっているわけではないので、発掘された例が乏しい。このことから分かるように、インドの考古学的研究においては、主要な信仰対象とされなかったものを研究することは非常に困難であるが、更なる発見により、新たな糸口が見つかる可能性も十分に残されている。

今後、本稿での考察をより確実なものにするためにも、逆に否定するためにも、新たな多くの考古学的発見がなされることを期待して待つこととする。

以上